

全自者協ニュース

- ・全自者協ニュース／第34号／2009年（平成21年）11月
- ・発行所＝全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎0593-94-1595
- ・発行人＝奥野宏二・編集人＝森下尊広・URL <http://zenjisyakyo.com>

児童精神医学と自閉症医療

市立札幌病院静療院児童心療センター
黒川新二

自己紹介を兼ねて、北海道の児童精神医療・自閉症医療について、お話しします。北海道では、昭和48年に、初めて、児童精神科医療機関ができました。それが、市立札幌病院静療院児童部（児童心療センター）です。昭和40年代は、多くの地方自治体が児童精神科医療機関を開設した時期です。

そのころ、児童精神医療が取り組んでいた主な対象は、ひとつは自閉症であり、もうひとつは不登校問題でした。二つとも、当時の考え方と現在の考え方とに大きな違いがありますが、自閉症のこどもたちへの組織的な支援がこの時期に始まりました。市立札幌病院静療院児童部の中には病院内学級が作られ、教員と医師と看護師と心理士とが知恵を出し合って、自閉症のこどもたちの教育を始めました。昭和48年には、まだ、地域の自閉症のこどもの多くが就学猶予状態でした。この病院内学級の取り組みが、北海道の自閉症教育の嚆矢です。

その後、昭和50年代に、自閉症専門の福祉医療施設（第1種自閉症児施設）が、全国に数カ所、作られました。市立札幌病院静療院児童部も、昭和57年に、第1種自閉症児施設「札幌市のぞみ学園」を設置しました。第1種自閉症児施設は、地域ごとのニーズの相違を反映して、さまざまな役割を担っています。北海道では、青年期の行動障害の入院治療のニーズが高かったため、「札幌市のぞみ学園」は、行動障害を持つ自閉症青年の入院を引き受けて来ました。私は、この入院治療を不可欠の方法であるとは思っていませんし、最良の方法であるとも思っていませんが、札幌市のぞみ学園の入院治

療は、自閉症青年への支援のあり方について、多くのことを考えさせる経験を与えました。

話が変わりますが、私たちが力を注いで来たことのひとつに、こどもたちへの早期対応があります。乳幼児期の自閉症ハイリスク児の発見と療育です。私は神戸大学で児童精神医学を学び、新生児・乳児・幼児の心理的発達とつまずきのフィールド研究に参加し、その後、乳幼児健診での自閉症ハイリスク児の発見と対応の試みを続けています。

現在、私たちのような形でこどもに関与してきた者と、発達障害者支援法をきっかけに、早期診断と早期対応に参加し始めた支援者とが、乳幼児健診の現場で出会っています。両者は、こども観も方法も異なっていて、互いに良い刺激となる可能性もあり、対立を生む可能性もあります。両者とも、自閉症ハイリスク児の発見と対応が大きな仕事であることでは同じなのですが、私たちの場合には、こどもを特定の範疇の障害であると判断することをそれほど重視しません。また、必ず特化した療育を行わなければならない、と考えていません。そして、診断マニュアルに記載されている障害の概念は幻かもしれない、という疑いを捨てないようにしています。

私たちには児童精神医学の変遷を振り返る機会がたびたびあり、障害概念は変わるものであること、障害概念に頼らずに発達途上のこどもを理解する方法を持つ必要があること、を学びました。それを、これからのこども支援を担う人たちに伝えたいと思っています。

世界自閉症啓発デー・シンポジウム開催と今後について

社団法人 日本自閉症協会
会長 石井哲夫

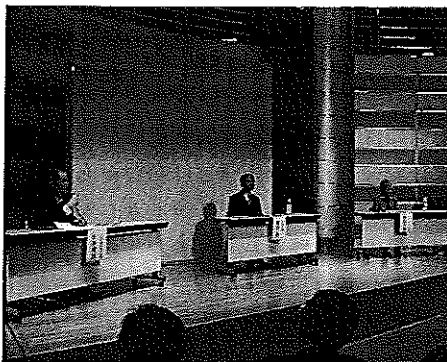
2007年12月18日の国際連合総会で、カタール首長妃殿下の提案された毎年4月2日を「世界自閉症啓発デー」(World Autism Awareness Day)とするという議題が決議された。また、これに伴い国際連合は、自閉症に対する家庭や社会全体の理解を進める啓発活動の推進を各加盟国に提案した。これを受けて、わが国でも社団法人日本自閉症協会が行政及び関係諸団体と共に世界自閉症啓発デー・日本実行委員会が組織され、「世界自閉症啓発デー・シンポジウム」の開催準備に着手し、全国各地の啓発活動の拡大を目的に4月2日から同月8日の期間を「発達障害啓発週間」とすることとした。そして、2009年4月2日に厚生労働省と日本自閉症協会の主催により、東京ウィメンズプラザ(東京都渋谷区)にて「世界自閉症啓発デー・シンポジウム」が開催されることとなった。本シンポジウムは、「自閉症」と

いう障害を通じて、各方面からの多大な協力と理解を得て、官民が一体となった画期的な取り組みである。当日は、多くの来賓を含め、自閉症支援に関わる方たちの熱意が溢れた満員の会場の中で開催され、自閉症への啓発と理解を進めた大きな一歩となった。シンポジウムに先駆け、午前10時より記念式典が開催され、主催者側から大村秀章厚生労働副大臣と社団法人日本自閉症協会会長である私による挨拶が行われた。その後、来賓の内閣府審議官柴田雅人氏、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課長斎藤尚樹氏、衆議院議員渡部恒三氏、衆議院議員福島豊氏により祝辞が述べられた。さらに、わが国の取り組みに対して国際連合事務総長潘基文氏(パン・ギムン)からのビデオメッセージが送られてきて、会場内で上映された。この中で、国際連合事務総長潘基文氏は「世界自閉症啓発デーにあたり、自閉症の子どもや大人の思

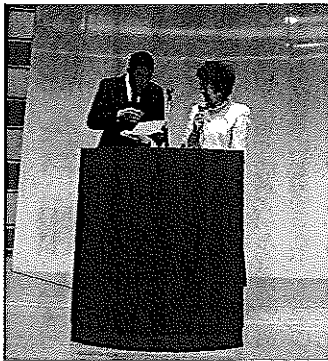
いを受け止め、共有しようではありませんか。そして、いろいろな場所にいる自閉症の子どもや大人が、協力的な環境の中で、持てる全ての力を発揮し、社会に貢献できるように、地球規模の努力を促進していこうではありませんか。」と力強く述べられた。

記念式典後、午前11時より私と社団法人自閉症協会副会長須田初枝氏、衆議院議員福島豊氏による「自閉症の人たちの人生を考える」をテーマとした鼎談が行われた。各々の立場から自閉症に取り組み、一方で、親の立場でもある須田初枝氏と福島豊氏から意見を伺い、長く自閉症支援に取り組んできた立場である私との活発な議論が展開され、わが国における自閉症支援の歴史を振り返りつつ、今後の自閉症への理解や支援の新たな活路を見出す上で有意義であった。鼎談に続き、午後13時30分からは、「自閉症の人たちとともに歩む」をテーマとして、社団法人日

本自閉症協会副会長山崎晃資氏とNHK解説委員室山哲也氏が司会を務めるシンポジウムが開催された。6名のシンポジストが各々の立場から15分間の実践発表を行った。まず、医療法人翠星会松田病院々長松田文雄氏は、自閉症の歴史を改めて整理されつつ、自閉症の特性や問題を医学的観点から説明があった。次に、全国情緒障害教育研究会事務局長長谷川安佐子氏は、体験談を交え、教育現場での自閉症の困難さを述べた。また、社会福祉法人けやきの郷福祉工場やまびこ製作所所長伊得正則氏と社会福祉法人嬉泉ひかりの学園支援員戸屋隆氏の両氏は、「自閉症



の人たちのすばらしい力と可能性」について、就労継続支援や芸術活動といった実践現場から意見が述べられた。さらに、自閉症の人たちと共に町づくりを目指し、活動を展開しているNPO法人いわて発達障害サポートセンター「ええ町づくり隊」代表理事熊本葉一氏からは、自閉症の人たちと1つの目標に向かって一緒に活動していくことで、お互いを理解できるのではないかとの意見が述べられた。最後に行政の立場から厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課発達障害対



策専門官日詰正文氏より「みんな」というキーワードから自閉症支援に関する課題と展望が述べられた。発表後、室山哲也氏の司会により、シンポジストによる活発な議論が展開され、当事者であるアトリエAUTOSの市川浩志氏と社団法人日本自閉症協会副会長石丸晃子氏による「世界自閉症啓発デー東京宣言」が行われ、会場の大きな拍手や賛同の声と共に記念すべき第1回目のシンポジウムは幕を閉じた。

今後の展開としては、一般の方々の自閉症に対する認識を広めつつ、広く参加していけるシンポジウムへと発展させていかながら、アジア全体での取り組みになるものにしていきたいと考えています。

自閉症児・者のための総合保障のご案内

(社)日本自閉症協会共済事業 業務代行ASJ互助会

掛金年額 15,600 円 (月あたり 1,300 円) で、病気・ケガ・第三者への損害賠償に対応！
 毎月受付しています。20日までの申込で翌月1日から加入できます。
 全自者協加盟施設に通所・入所されている方はどなたでも加入できます。

日本自閉症協会共済事業より・・・入院2日目から30日間を対象

- | | | | |
|---------|----------|-----|-------------------|
| ①入院共済金 | ・付添人費用 | 1日 | 8,000円 (6時間以上の付添) |
| (病気・ケガ) | ・差額ベッド費用 | 1日 | 5,000円までの実費 |
| | ・入院臨時費用 | 1入院 | 5,000円 |
| | ・入院諸費用 | 1日 | 1,000円 |
| ②死亡弔慰金 | 病気によるもの | | 50,000円 |

AIU傷害保険より・・・入院・通院 初日から対象

- | | | | |
|----------------|--------------------------|--------------|---------------|
| ①傷害保険金 | ・入院1日 3,000円 | ・通院1日 1,500円 | ・手術保険金 12万～3万 |
| ②死亡保険金・後遺障害保険金 | ケガによるもの 300万～9万円 | | |
| ③第三者損害賠償金 | 1事故につき 最高5000万円まで (免責0円) | | |

◆◆詳しくは下記までお問合せください◆◆

ASJ互助会 事務局 月・火・木・金 10:00～16:00
 TEL 03-5287-1391 FAX 03-5287-1392



平成二十一年度 総会報告

◇第一回理事会の開催

四月二十七日、名古屋駅モリシタビル会議室で平成二十一年度第一回理事会が開催され、年次総会で諮る議事内容を討議した。それに先立ち、監事による会計監査も行なわれた。監事監査、理事会ともに役員全員の出席を得ている。

◇平成二十一年度総会の開催

全国施設長会議の前日にあたる五月二十四日、横浜駅西口ビジネセンタールにおいて、全国自閉症者施設協議会の年次総会が開催された。多忙な時期にもかかわらず、出席の三十施設に加えて、二十四施設から議長等への委任状の提出があり、議決のための定数を十分に満たした。

◇中央情勢報告

会長の開会挨拶に続き、日本自閉症協会会長で、本協議会の副会長を務める石井哲夫会長より、中央情勢報告が行なわれた。障害者自立支援法や世界自閉症啓発デーに関する内容や今後の方向性についての提言の他、支援現場にお

る実践研究や職員育成の重要性、成年後見などにも触れられた。

◇議事の進行

千葉県・袖ヶ浦のびろ学園の沼倉実氏が議長に選出され、六つの議案が検討され、いずれも出席者の全員一致で承認を受けた。

(一)平成二十年度事業報告、および障害者保健福祉推進事業の報告が事務局から、昨年の第二十二回研究大会の報告が神奈川県・やまびこ工房の中島博幸氏から提出された。

(二)平成二十年度決算報告、および上記した諸事業の決算報告の後、監事の神奈川県・東やまた工房の関水実氏より、適切に会計処理がなされている旨の報告があった。

(三)平成二十一年度事業計画、(四)平成二十一年度予算が事務局より提案され、承認を受けた。また、会員の動向について、宮城県のみかり苑、個人会員一名より提出のあった退会届が受理された。この結果、二十一年度当初で

の正会員施設数は六十七施設となった。

(五)第二十三回研究大会は、本年十一月五日と六日の両日に札幌市内で開催予定となっている。北海道プロックを代表して、主管施設の北海道・厚田はまなす園の菊池道雄氏から大会要項案が提出され、検討が行なわれた。

(六)来年の第二十四回研究大会は、平成二十二年十一月、長野市内において北信越プロックの施設が協力して開催にあたることとなった。主管施設には、長野県・白樺の家が決定している。

◇平成二十年度に実施した事業

①平成二十年十一月十三日から十四日、第二十二回研究大会(神奈川県大会)の開催と報告集の発行、②平成二十一年度の第二十三回研究大会(札幌大会)の計画、③会報(全自者協ニュース)の年二回発行と関連団体等への送付、本協議会ホームページの整備、④調査研究活動(平成二十年度障害者保健福祉推進事業「自閉症や強度行動障害を示す人々への支援を効果的に行なうための事例調査および事例検討」、⑤厚生労働省等の行政機関、日本自閉症協会や日本

知的障害者福祉協会をはじめとした関連団体との情報交換、連携、要望活動、⑥世界自閉症啓発デー準備委員会への参画、他があげられる。

◇新体系事業移行実態調査の実施 今回の情報交換にあたり、平成二十一年四月一日現在で新体系事業へ移行している正会員施設の実態を調査した。すべての対象施設から返答があり、調査日の時点で新体系事業に移行した施設は、全体の約半数(五十、八%)となった。この結果は、他の知的障害者施設のデータとはほぼ類似している。また、移行したのは通所施設が最も多く、次いで単体の入所施設、移行した数の少ないのは、旧体系の入所施設に通所部や分場を併設した施設となっている。

◇ASJ互助会の給付状況

従来から、在宅でパニックを起し、第一種自閉症児施設や精神病院等に入院して給付を受ける者が多い。また、本人からの入会希望が増えてきたことなどが、トピックとしてあげられる。

(全自者協事務局)

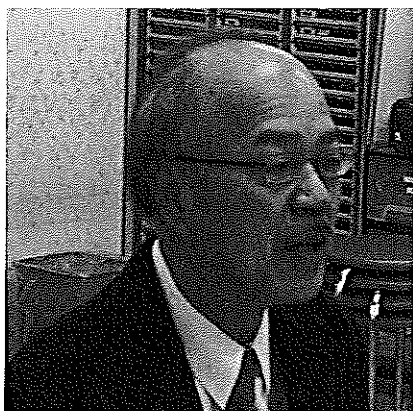
対談

日本自閉症協会会長
石井哲夫／石井聖

●石井 聖氏の紹介

石井聖氏は、慶應義塾大学文学部および法学部卒業後、1965年福祉事務所にてケースワーカー（知的障害者福祉司）として勤務。1971年立川市ドリム学園設立と同時に指導員となる。1980年より1983年まで、同学園園長を務め、1983年自由な視野から見た障害児（者）の治療教育を実践するため、小露路治療教育研究所を設立。メンソッドの創始者として、コロロググループのスタッフに対し、集団療法士（Group dynamics Therapist）及び学習療育士（Learning Therapist）の認定を制度化し、「G.T・L.T資格認定委員会」を発足させています。

現在、コロロ発達療育センター所長、社会福祉法人コロロ学舎理事長として、独自の



在宅プログラムを通して全国ネット（11ヶ所）で自閉症に対するトータルケアを展開されています。

今回は、コロロ発達療育センター所長石井聖氏と全自者協の副会長また社団法人日本自閉症協会会長石井哲夫氏に、長く現場の中で自閉症療育に対して携わってきた実践者として、自閉症療育の難しさ、人材育成の難しさについて語っていただきました。

聖

石井（哲） 全国自閉症者施設協議会が年2回発行している全自者協ニュースの中で、私が色々な人と対談し記事にして皆さんに見ていただいています。今年は色々頑張ってきた方々を訪問する形で行いたいと思います。石井聖先生の事は実は正直なところ、色々誤解していた点があり、一体どういう事を実践しているのか興味を持っていました。しかしながら、この間コロロE.Tセンターが26年を迎えられ、まずは昔からのお話をうかがいたいと思います。どうぞ先生からご自由にお話し下さい。

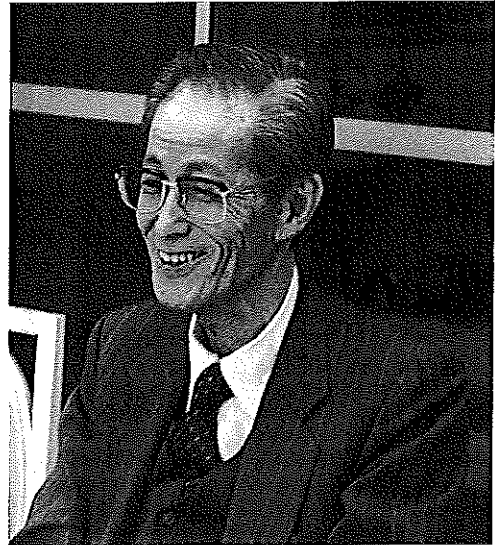
石井（聖） 私が立川市役所を辞めたのが、ドリム学園という幼児の知的障害の通園施設でしたが、そこで働いていました。もとは事務職、一般職でした。30数年前、児童指導員という職種もありませんでした。そういうものができてから指導員として移りました。それまで老人施設に間借り

していましたが、専用の新しいドリム学園を私を中心になって計画し、その建物が出来たらその翌年に異動になりました。人事担当が言うには、こういうものが新しく出来たら、異動になるのが慣例なのだ。それで私は怒り出しまして、その時東京都は人事委員会でした。地方は公平委員会という職員の不服申し立てする機関があり、そこに申し立てしました。一応、受理されて、はたしてこの人事はどうなのだという事で審理手続きに入りましたが、入った時の条件は確かに一般職なのです。でもそこでやりますと、何年かかるのか、身分も宙ぶらりですし、ばかばかしいことは止めようという気になり在職18年で、数ヶ月後退職届を出し、それはケリがつかしました。

その後、国分寺にわずかな退職金を使い、建売住宅の古いのを買いました。広さが6畳2間しかないところで始めました。その当時、ドリム学園の卒園生たちで私たちに付いてくる人もいましたし、「どんなでもない、あんな危険人物は嫌だ」と来ない人もいましたが、子ども7人で始め30人くらいにな

りました。評価は色々とありました。その当時幼稚園や空き室が結構ありましたから、体育館を借りに行くと、「どうぞどうぞ」と言っても、ちよつと調べられると、あの時に問題になった人だとお断りされたり、そんな時代がかなり続きました。

石井(哲) 問題というのは、その辞めた、提訴したということ。
石井(聖) そうです、その当時、新聞、テレビをにぎわせてしまった時期がありました。テレビは人の顔だけアップにするのであれが嫌で僕はテレビが嫌いになったわけです。そういう形で放送されると、客観的に見ても、やつぱりこつちが悪いという印象を一般の人たちは受け、「あそこには面倒くさいやつがいる」と、組織はまともまらないだろうなというふうには思われてもしょうがないと思えました。



石井(哲) それでもそのような気持ちを持たれて、小さい家を買われて、そこで始めたわけですね。その時に、ドリーム学園の時間にお世話した方などが先生を慕ってきたのだらうと思います。そういうところから出発されたのはたいたいものです。

石井(聖) そのコロロという名称も、カタカナでコロロですが、特に意味はありませんが、いかにも障害者関係の名前を付けると、住宅街の中ですから、周り近所から反対を受けてしまいます。認可を取らなくても勝手にできるとい

うものの、それで何屋さんか分からないような名前をつけました。近所の人から窓からのぞいてみると障害者ですが、ちゃんと正座してお勉強しているの、それでは周りも静かにしてあげましょうみたいなことでもうまいったと思います。

石井(哲) コロロの初期の指導方法というのは、どのような考えでなされていたと理解したら良いですか。きつとビジョンを何かお持ちになって、図っていたわけで、そこへ人事委員会から動けと言われた時に、「自分はどうしてもこれをやりたい」という何かがあったでしょう。

石井(聖) いろいろありました。教育方法です。それをつかみかかった時期なので、あと2年くらいやらせてもらえれば、その時は気持ちよく自分から希望出しても異動に応じるつもりだった。役所がいったん出した辞令はそうはいきません。そのころのドリーム学園は、いわゆる認可をとっていない定員20名の幼児通園施設です。肢体不自由児も若干いました。もちろん毎日通園ですが、通園して来る人が13、14名くらいです。

どうしても4、5人くらいは休んでいる。指導員が11人くらい、園長を入れて12人くらい。1対1に近い体制で、それでも指導員が足りない。腰が痛い、あつちが痛い。私もいよいよ怒ってしまいました。やはりこれは人が足りないという問題じゃないです。やり方がどこかおかしいから、これは180度転換しなければいけない。

それこそ石井哲夫先生は絶対そんなことはおっしゃっていないと思います。なんでもかんでも好きにさせるのが受容ではありません。ですが、なんでもかんでも好きにしなくてはいけない。ちよつとどこか強く触ったり、ちよつと強い口調で言葉をかけるのもいけないという極端な風潮が一時期あったことは事実です。そのような人たちは、今では、ちよつと想像できないと思いますが、思想的にあつちのほうに偏った人たちが集まって来て、その現場をつかまえてつるし上げていた。学園紛争や東大紛争がすごく激しい時でした。その風潮の中で、私が今まで言っていたことを180度ひっくり返したことで、一緒にやっていた支援員も、「石井(聖)は何だ、あ

んなふうにくるくる変えるのか」というような批判を受けることになりました。ただ親だけは、ほとんどこちら側についてきてくれました。自分の子どもを預けているのですから、嘘か真か親は本能的に見抜けます。そういうこともあって、これを役所の組織の中でやるのは無理だと思いました。

石井（哲） そうすると私の記憶で具体的に名前を出すと、もう亡くなられましたが、平井先生、それから田口先生という受容派の人がいました。その人たちの考えは徹底した「無介入受容論」であり、一時、私も自閉症の人たちの療育に取り入れていましたが、ご指摘のように何も動かない。自閉症という障害やその支援について誤解を招いた。これは後で自分で勉強してみると、非常に深く、自閉症の人たちの傷ついた体験がある。やはりその時は、彼らの内面の世界にもっと触れてみたいと思いました。我々が言葉で共感と言いますが、共感する事はとても難しい事です。ですが、分かりたいという気持ちがありました。平井先生は、非常に尊敬していた先生で、ウィーンで国際学会があった時に

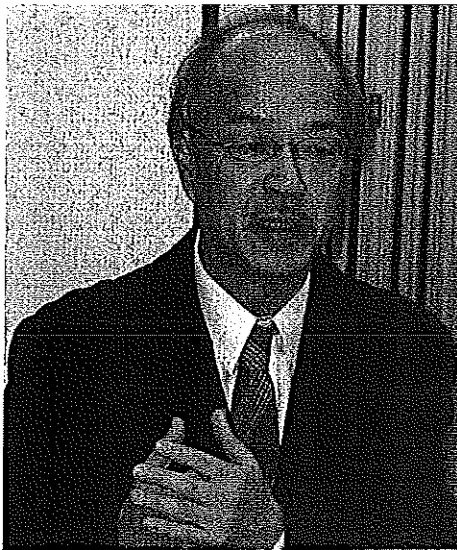
私も一緒に連れて行ってくれ、アスベルガー教授とお話をしました。どうも向こうで考えられている自閉症の理解や指導というのは、違うのではないかと、私なりの勘が働きました。

それで自閉症の人たちに対して療育が出来る機会ができ、私なりの受容的交流理論を掲げました。しかし、受容というのは常にたたかれます。これが1975年のマイルケル・ラターの脳障害説から大きなパラダイム転換が始まりました。そこへきて、今まで受容的遊戯療法を謳っていた人達の中から、行動療法の方へ移るサイコロジストもいました。私たちは、分からないものを分からないままにしておけず、関わりだけは続けていこうと取り組みました。私も紆余曲折があり今日に至っています。自分、先生は相当はつきりとは自分の考えを出されて、関わったのではないかと思ひ、その所をうかがいたいと思います。

石井（聖） ドリーム学園の最後のころから、集団を使うと良いということの効果を実感しまして、もう少し積極的にダイナミックスをして、行動を変容させていきな

がらやってきましたと思います。立川市を辞めた後に、私たちに与えられたスペースは6畳2間で、ここでプレイなんてできない。それで畳1枚、紙1枚でこの子たちを良くする方法はないかということ。それから本格的に言語学習、いわゆる学習指導に取り掛かってみました。これが意外と良かった。最初から言葉の学習をしようと思ってきたわけではありません。始めたころは集団を使って、とにかく社会性を育てると良いのではないかと思っていました。始めてみて、どんな言葉が出てくる子が増えてきました。やはり言語

というか、概念の構築・獲得という教育の方向性が非常に重要だということを実感し、お母さん方も非常に喜ばれました。3年生になつてから発語したという子もいました。それ以来、言葉療育に重点を置いてやってきました。言語療育で、私たちが食べていかななくてはならない状況に追い込まれていきました。療育相談料という名目を使っていますが、かなり安くもない月謝をいただいています。それにはそれだけの成果を出さないと絶対ついてきません。ですから必然的にそこにいつてしまったということがあります。ただちよつと話を戻



しますと、ドリーム学園の場合には、1人2人でも、畳30畳、40畳いや40坪のワンルーム。ただ定員20人です。少し固まると幼児20名はその隅にまとまります。しかし、ここでも動だからというので、1対1で迫りかけ回すと

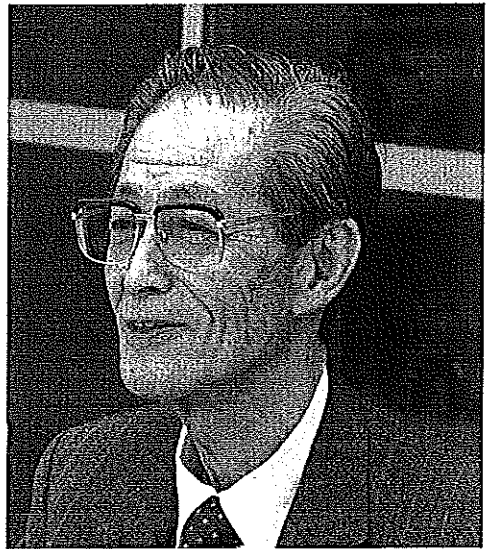
延々と逃げ回り、拳句には押さえつけますと、今度はその子にべつたりになります。とにかく担当も決めないで、直接は触らない、できる限りまとまって行動しようというのをひとつの哲学みたいに打ち出しました。それで非常にうまくいきました。

今度は市の通園を辞めて、コロコの教室に入った時に、6畳2間ですが、そこにエレクトーンなどもありまして、実際にはもともと狭いのです。そこでやると言っても、今度は逆にそれこそ畳1枚分くらいのところ、1対3から1対8くらいの少人数のスタッフで対応せざるを得なくなりました。ですが考えてみると、この隣は2DKの5階建てマンションです。昼間でも時々、「あー」と大きな声を出している子どもがおり、明らかに自閉症でして、現実にもそこで生活している人達がいるわけです。都内に住む人たちの中では、そこで、3人、4人家族くらいで、2DKの中に大学受験のお子さんがいれば、1部屋占領することになる。そうすると自閉症の子どもは、やはりどうしても畳1枚分くらいのところ、一応、きちんと

言うことを聞きわけて、生活させていかなければならないわけです。今、思うと、必然的にそういう状況に迫られて、このようなやり方でやらなければ生きられないという結果になり、メソッドが開発されたわけです。

しかし反対に、西多摩の瑞穂町で私どもが運営している社会福祉法人そうせい学園・瑞学園の方は、周りが畑です。広いところでやっていますので、少々、通所入所者が大きな声を出しても近隣には聞こえませんが、近頃の農家は数百メートル先です。今だから思うのですがコロコ発祥当時、そうせざるを得なかったという歴史的必然性があります。そうしていかなかったら、私たちは食べていけなかったという事実があります。

石井(哲) それは本場に正直なところ、私が子どもの生活研究所



を始めた時も、結局は珍しいからみんな来ますが、疑問を持つ人は辞めていきます。そうした先ほどのマイケル・ラターの話ではありませんが、世の中の流れが精神分析の考え方から、だんだんと脳機能局在説の方向へいきます。そうすると我々がやっていることは一体何なのだろうということになってくる。そのところで、色々な考え方との対比がされるわけで、行動療法の場合も小林重雄さんや、中野良顕さん、あるいは私の同級生の山口薫さんという人達は当時、みんな彼らは行動療法の立場

で、そして心理学会の壇上で私とやり合うわけです。しかし、こちら側には誰もいないのです。つまり平井先生はDrですし、サイコロジストではない。その経過の中で、福祉の立場というのがだんだんと出てきます。結局、ソーシャルワークは、カウンセリングと近い立場にありました。個別指導する場合でも、基本的に相手を受容し、環境へとつないでいくという事がソーシャルワークの考え方です。依拠しながら実践をしていくという状態になったときに、交流という言葉を思いついた理由は、人間関係ができにくいところが非常に大きいと思っていました。

ただ私たちがアメリカに行った時に、あちらではスピーチセラピストというのが非常に活躍していました。そして小さい子どもに対しての言語療育も非常に上手にやっていました。日本の場合は、言語聴覚○○センター、聴力○○センターで取り組んでいるくらいで、たまたまなのかもしれませんが、日本社会事業大学に専門のスピーチセラピストの基本的ことを教える先生が来ましたが、その先生とは意見交換をして通じ合うとこ

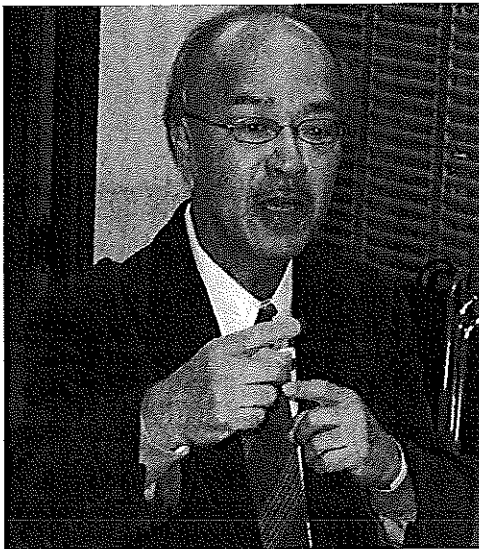
ろもありましたが、やはり違いました。

どこが違うのか考えていきますと、やはり私は精神分析に近かったと思います。基本は、自閉症の人たちにいつも臨床的に接していくと、ある時になぜこの人のトーンが「パツ」と、これほど変わっていくのか、そして驚くぐらい言葉が出てきたり、人と関わろうとする姿勢が出てくる。ただし、どうしてもそれが納得いかない。感情が通うというのは、こちら側の見かたで、相手はどうも違うのかなと思いました。その時にたまたま平井先生が指導をしていた武蔵野東学園へ行きました。良いという事で行きましたが、もっぱらやっているのはものすごい勢いで着座、着席の訓練をやっていました。そのことと聖先生が重なってしまい、どのような関わり方をしているのかと思つたのです。きつと畳1畳の指導というのは、何かきつとおやりになつたのですか。その辺のところをうまくお聞かせ下さい。

石井(聖) その誤解がすごく多くて、子供たちを強硬に抑えつけて座らせる。それが1回くらいで

座ってくれたら、誰も苦勞しないです。それをやるから余計に反発が強くて、大変なことになりますよね。力づくでやらないで、ずっと引き込むのは、やはり集団が一番いい。経験から有効だと思つたのです。結果的に畳1枚でできる場所へ早くもつていくように、あらゆる手段を用いて努力はします。10分くらいで到達できるようにまとめました。反コロの悪しき情報をもらつて、親御さんが連れてきます。見ると聞くでは大違いで、みんな静かにしています。最初から新しい場面に入れない。ぎやぎや泣く子がすつと入つてしまいます。すつと入れなかつたら商売にならないのですよ。これは毎日通所通園もありますが、原則的には週1回でやっています。週1回で遠方から来られる人は電車や、車で来ますが、2時間くらい普通なので、そして連れて

来て泣かれると、1回目だから泣いてもしょうがないとは思いますが、週1回ですと、来週また来ると、また泣きから入るのですよ。そうなってしまうと、もうどうしようもないです。できるだけ事前によく説明しておいて、お母さんには上手に別れていただく。あまりそこでもいろいろなことを説明すると、子どもが別れることにこだわりを起すことになる。それに対して不満を持つ親御さんもいたり、そのところが結構、難しいです。でもちよつと我慢してさつと別れていただくと、最初ひどく



泣いても、まあ15分くらいしてお母さんに戻っていただいて、集団場面に泣かないで入っている様子を見ていただけると、ものすごく安心していかれます。

初めて来たお子さんで、泣かずに1時間以内に30分くらいの着席が可能になります。ただ20人来ると、1人くらいは少し手こずります。そのくらいの確率で、大体30分の着席は、来たその日の1時間以内にできます。その方法を用いて、成人の入所、通所もやっていますが、今、入所施設がちょうどここで10年を迎えまして、シヨートステイ、入れ替わり立ち替わり、大物と言われる行動障害の強い方が数百人くらい来ています。もう200〜300人来ています。のですが、本当に自慢をするわけじゃないのですが、その日のうちに集団行動がとれなかつた子は1人もいません。ただその代わり、ものすごく神経を使って受け入れますが、絶対パニックを起こさずに、不適応反応を起こさずに夕食にはみんな100人くらいいる食堂にすばつと座って食べられるようになります。

石井(哲) 一言で言うと、どの

ような方法で動かし、対応していただくことなのでしょう。

石井（聖） 私たちの言葉で言うところ、集団感応という方法を使うのです。集団的にスムーズに流れに引き込んでしまう。感応というのは反応という意味ですが、みんながやっているですと入ってしまう。みんなが静かにすると、その子も静かにする。みんなが騒げばその子も騒いでしまう。同調するというか、同化するというか。したがってその集団は非常にいい集団でないためです。母集団が非常に重要で、母集団を作るところから気をつけていかなければいけない。静かで落ち着いていて、見て分かりやすい。自分が次に行動すればいいかということが分かれば彼らは非常にスムーズに行動できます。

石井（哲） それは斉一化されたということですか。同じ行動をとるといように仕向けていく。それはどういう手段でそういう斉一化が起きるのでしょうか。

石井（聖） 先ほどの交流の話の中で、うまく人とかかわりがとれないから、だから交流が大事だとおっしゃいました。その通りだ

と思います。ところが行動分析で交流とは言いません。そうすると、僕はやはり刺激反応だと思いません。その刺激場面に適応した反応がある。これは、市役所ドリム学園の時代、当初は私は全部好き放題させましたが、好き放題させても何も結果が出ないので転換しました。その時に行動療法の本を読みました。刺激→反応と書いてあるのです。どれが刺激で何が反応なのか全然分からなかった。ある程度、手ごたえがつかめてうまくいくことが分かったところに読み直してみると、あらかた読めました。今でも私は行動療法の門下生ではないので、勝手に刺激反応と使いますと、そういうのは行動分析ではないと叱られたりもします。その場面、瞬間なのです。それを見定めるのはものすごく難しい。これはできる人と、超鈍感な人といてちよつと難しすぎるのが欠点だと思えます。関わり方がまずいから、つまり支援員側の触り方や声のかけ方がまずいからということ、極端に言うところ、触らない、声をかけないで最初もつていきましようという事になります。

石井（哲） それは非常にやや神がかり的な印象を与えられるものですが、その雰囲気というか、その感じというのは、感覚的に分かることばかりTEACCHはやっていきます。それでTEACCHの佐々木正美さんとも議論しました。やはり直接会って話をすると分かることもあります。どこが分かるかと言いますと、結局、佐々木さんの持っているのは、相手の困っているところをきちんと受けていく。最初は親との関係から出発しています。親の困っているものは何か、子どもが言うことを聞かないとか、子どもを分からせるような方法として、視覚教材とか写真を使うところへ進んでいきます。けれど、それはTEACCHではないということ。我々は聞かされていて、日本のTEACCHは視覚的などころを強調しています。ともかく分かり合う関係というものが、すごく大事だということを言っています。

今の話を聞くと、私は集団というの、一番その集団で反発しているのは斉一化する、統制をやる

ことはきつと難しいのではないかなと思っていました。ただ、いま非常に興味があるのは、一昨日の土曜日に、心理学会がありました。その時に、今の中心の理事長の増野肇さんと対談しました。その時に彼はこういうことを言いました。「先生、今、非常に自分は大學生に興味を持っているけれども、大學生の中になかなかアスペルガー症候群がいる。それが1対1のカウンセリングだとなかなかできないけれども、ゼミの集団でやると、ものすごい効果があると言います。その辺はどう思いますか？」と言うので、そう言えば、我々の経験の中で、幼児の通園施設めばえ学園での状況をずっと見ていくと、確かに聖さんが言うように集団は教育効果をもたらすものなのです。最近になりすごく意識します。だから障害児保育というジャンルが保育所の中でありますが、それをいま私どもは、どうやって自閉症児を受け入れる集団を作っていくか模索中です。

今日、実はここに来る前に武蔵村山にある中藤保育園というところに行ってきた。そこは見事に自閉症の人をグループの中に入

れています。私はそういう保育所もあるのだということも知らせないといけない。今のお話を聞いてみると、そこは非常に分かる感じがします。そのように、親も喜び、親が感じ、子どもさんも安定していく先の学習も何か考えていらっしやるのですか。

石井（聖） 齊一というのは大好きな言葉で、少なくとも療育現場であまりそういう言葉を使わなかったのですが、今、哲夫先生からこの言葉を聞けてうれしく思いました。それもできるだけ早く作ってしまおう。普通、着席行動、集団行動というのはかなり先の目標になります。これをできるだけ早くしたいということなのです。スマールステップを私たちはものすごく小さく細かく作ります。そうしないことには、今日連れてきて、料金をいただいて帰って、お母さまに宿題を出します。そうしないと、療育システムが成り立たないわけです。ですから私たちは在宅プログラムを主としてやっているのです。ちょっと自慢が過ぎたら大変申し訳ないのですが、やはり在宅プログラム（家での過ごし方）として、お母様に課題を出

して、1週間後にやってきていただく。そして、家で出来たか出来ないかこちらでやってみる。こちらにやってきました、うまくいかない場合がありますが、できるのは当たり前なので、それがお母さんにお渡しして即できれば、誰も苦労しないのですよ。お母さんのやり方とかお母さんの対応のまずさが、交流の力のまずさがありますよね。それをこちらで分析しながら、こうやってみたらどうですかとお返しする。その意味では、在宅プログラムで一応、全国ネットでトータルケアをやっているのは、ここだけじゃないかと自慢したいのはそこなのです。沖縄の那覇から熊本、松山、神戸、名古屋、郡山、12くらいですね。ただ、そのスタッフが追い付かないのです。それでもたまたま上げがせるということがないわけではあります。

言葉や私たちの行動トレーニング、これも多分、受容派の方が多くと嫌な言葉だと思っております。行動トレーニングというのはコロボに来た時、ひとつの齊一感、いい行動がとれたとしても、これがお家において、学校に行って、それ

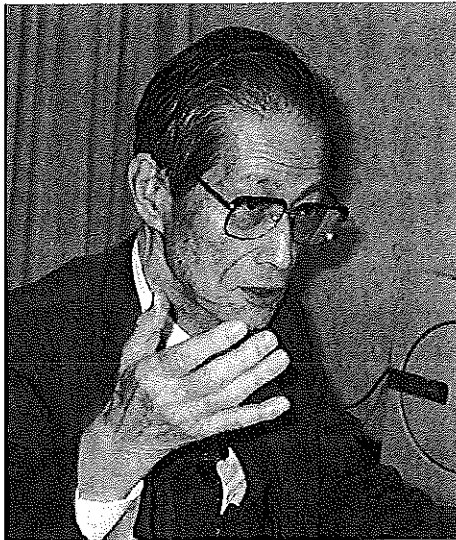
ができないというのはあまり意味がないと思うのです。それを目標にして、月並みに言うと、どこでも、誰とでも、いつでも、同じように行動がとれるように目指す。それがなかなか難しいですね。

石井（哲） 特に私が感じるのは、学問的なものは多分、応用行動分析で一応筋を立ててやると思いますが、例えば非常にスマールステップを細かくすることについても、子どもの見立てやどこを取り組むかについての勘どころというのは、マニュアルでは計れないのではないかと思えます。そのところを統一的にやるとするならば、

かなり大きなフレームを考えた、あとはその人にやらせる部分にならざるを得ないだろう。その辺でおっしゃる感受性の豊かさは、いわゆる行動療法では取り上げられない、応用行動分析だと、かなり昔の行動心理学とは違った形で割り切れる。我々はどちらかというところ、やはり自分の中で人間として納得がいくストーリーというものを考えながら、そしてそこからどうしたらいいだろうかと考えていく。

例えば言葉の場合、1つは彼らがこちらの意図しているような言語学習に対応してくれるのだろうか。それを使用できるのだろうか。

こちらの使用しているような形で言語学習して、使用できる言葉というのはどのくらいあるだろうか。これが例えば私の体験で言うと、極めて少ない。つまり非常にコミュニケーションをとれているようですが、同



床異夢という状態が非常に多いということを経験します。これまた私どもが非常に困難なのは、求められているセラピスト・指導者の感受性が分からないです。縁があつて偶然上りつめて、このことで通じ合えている。つまり話を通じあう人がそこに残るといふ感じがします。あえて申し上げるなら、言語学習の持っている意味とか範囲は、なかなか難しい問題ではないかと思ひます。その辺を、もう少しつとつかがつてみたいと思ひます。

石井（聖） 確かに言葉をあえて取り組む、中心課題といひますか、選んでいるのは、やはり親御さんです。特にお母さんからの要望が非常に強い。何回も言つて申し訳ないのですが、やはり強いということ、表現が悪いかな、商売として成り立つ側面が強いから、あえて言葉を選んだこともあります。ですが、例えばしばらくの間、「気を付けていきましょうね。」あるいは「物を持って、運んで帰ってきましょうね。」これが言葉の理解がなくてもある程度のトレーニングで、場面設定でできるのです。それはたまたま言葉

というものを選んで、呼びかけています。それ以外のことを課題として選んでもいいのです。むしろ同じことなのです。ただその場合、ちよつと触られるとパニックを起す多動な子どもに対して、課題をさせるとします。例えば、課題という刺激を与えてから「さあ、取りなさい。」「書きなさい。」と言ひ、子どもは3〜5秒以内に反応するといひますが、とんでもない0.何秒の単位なんです。それをやらなくてはいけなひのです。

そうすると最初の話に戻りますが、石井哲夫先生は交流とおつしやつた、その限りでは、まさに交流なのです。私の友人に片倉信夫がいますが、彼はかなり乱暴なことをやるように見えますが、実際にそういう言葉の前で、彼がやることを見ると、触り方がものすごく神経質です。そうすると、それは刺激反応の方が説明がつくのではないかと私は思つたのです。

石井（哲） そのようなとらえ方でいくと大体近づき、同じところを触れていると感じます。1つは先ほどつかがつたことですが、どの程度の範囲内で共感者と言ひま

すか、自分もやれるぞというような職員がおそらくいたから全国ネットができたのだらうと思ひます。私は名人芸だと言われて、なかなかそのようにはいきませんが、ただ考え方はかなり普及されているだらうと思ひます。そういう点では、これからは色々な方に会つて、考え方が違つていひないといふことの確認をしていくことは大事なことです。

そこで仕事のまともに入ると、結局は社会が理解できにくい人たちを理解し、そして支援している仲間として、考え方とか方法論が違つたとしても、結局は具体的に「その子がこうなつたよ。」その子が犯罪を犯さずにこう育つたよ」という事実がいつばいあれば、これで結構なことです。1つは人との付き合ひがどうかについて、親子関係や友達関係、ご近所の人等、人との関係との進展といふのは、言葉によつてかなり進んでくるだらうと私は思つています。そういう点では、言葉を違ひ意味で使ひ、気持ち共有できなくとも場面は共有できるということがあると思ひつかがつています。その辺のところはどうで

しようか。

石井（聖） 言葉というのは要するに抽象概念ですよ。ひとつの言葉は、その意味の反対の言葉まである程度包含しています。そんなところを求めるのは無理ですが、逆に言うと、言葉の出ない子がこのやり方で言葉を見つけた。最初は例えばお父さんの写真を見て、パパと呼びかけたりします。それはパパから、1対1の対応で言つているだけで、お父さんという抽象概念が分かっているわけではないのです。ですが、重いほうのグループの方は、誰にでもパパ、パパと言つてしまふ。そうすると本当にこれは分かつていひない。でも、パパといふことが言えなかつた段階で、女の人に向かつてまずパパとは言わないです。男の人を見るとパパと言ふ。それでも何もできなかった時から比べると、これだけのことができたといふ結果がある。ところが言葉の問題に関して言えば、一番厄介なのは高機能の人達です。なんでもしゃべるし、専門用語を使う。ですが、あの人たちの言葉は、我々と同じ言葉を使うといふよりは、もっと高度な言葉を使ひますからね。世界が違

います。

石井(哲) そうです。概念は進みますが、認知というものの奥にある立場が違います。だから、彼らの世界で作った家と、私らの定型発達の人が作った家というのは違うと言われるのです。ですが非常にある部分は、同じように生活行動ができるから触れ合いますが、なまじ触れ合うために違いが目立ちます。だから全部が地域化や社会化と言いますが、病院の中で監禁している状況がまだ続いている。そこから見れば、福祉施設は非常にオープンである。

もっと大事なことは、高機能の人たちをどのように、集団の中で関わっていくか、私もグループを作り関わっていますが、なかなかその方向は分らないです。

今日、発達障害という概念を作ったために、発達障害の中でも自閉症がかなり多いにもかかわらず、学習障害でかぶせる。学習障害という概念はまた違った概念です。少なくとも自閉症なら自閉症に携わってきた人たちと連携を持って行きたいと思っています。自閉症スペクトラム学会もありますが、教育の方面です。施設の方

面にも全国自閉症者施設協議会という連携があります。そのような機関をつないで、自閉症チームという支援チームのようなものを作っていきたいと思っています。

日本は本当に輸入文化です。そして私はいま、金子書房に頼まれ自閉症の文献をずっと調べていきますと、日本が独自で開発したものは無いです。

我々の療法も考えてみれば認知行動療法にも入れられます。ただ、その認知なるものはくせものでして、応用行動分析にも入るだろうと思います。やはり捨てがたいのは、先ほど精神分析と言いましたが、私はサイコドラマを以前からやっています。職員の研修にも進めていこうという考えを持っています。そのサイコドラマもつまるところは、結局は支援者が自分自身をどう操作するかということに関わることなのです。

ですから、先ほどおっしゃられたような気持ちのつかみ方や関わり方は、それは職員にもよりますから、いくら関わってもなかなか変わらない場合もあります。

石井(聖) 本当におっしゃる通りで、すべて人への対応の仕方が

演技なのです。極端なことを言うのと、自分の家庭の中に入って、子供だって、女房だって、なんだって全部演技ですよ。その意味でちよつと最近、僕もスタッフ向けにサイコドラマとしてやっているわけじゃないのですが、少しロールプレイングのことをスタッフ研修で取り入れてやっています。やはり自分の行動を客観的に見る必要がありますから。

石井(哲) 客観的に見るとことはすごくいいです。ビデオがすごく普及しています。

石井(聖) ビデオも確かにそうですが、始めた時代は、今みたいなコピー機はなかったもので、同じ絵を2枚同じように描くというのはすごく難しいことでした。今の人たちはコピー機がない生活ということが実感できないです。だからビデオはありますが、ビデオに映っている自分を見て、「ああこの触り方がいけない。ここはもうちよつとこうするとよかつたかな。これは強すぎたかな。」と思えても、やはり人から言われないうとだめなのです。またこの考え方は嫌がられますが、絶対にサイドコーチを入れなかつたら育たない

と思っています。我々は、スーパーバイザーをサイドコーチと言っています。

石井(哲) おっしゃる通りで、それはものすごく大事です。我々はスーパービジョンと言っていますが、そういうことができるスーパーバイザーと、それを受けられるスーパーバイザーの関係というのは作っていかなくてはいけないと感じます。

石井(聖) しかし、現在そういうことを若い人たちが嫌がるようになってきていますよ。とにかくちよつと言うのとめげる、そしてすぐ辞めてしまう。また、人に対して叱れない、注意もできないです。それはでは困ります。

石井(哲) 本当にもう大学の先生と話すとき必ず出てくるのが学生の質なのですが、我々も人集めに苦労します。こういう仕事ですから、なかなか大変ですよ。やはり社会の状況が、そういう意味のバリエーションが変わってきているのだろうと思います。今回は有意義な御意見を沢山聞かせて下さりどうもありがとうございます。

第23回全国自閉症者施設協議会札幌大会開催要項

1. 大会趣旨

自閉症の方々やご家族が安心してくださる
社会のために私たちは何ができるのか

自閉症スペクトラムの考え方が広がり、「知的障がいを含めた自閉症」の方々だけではなく、高機能・アスペルガータイプの方々への支援をどのように考えていくのかという課題も浮き彫りになってきている。福祉をはじめとしたさまざまな支援関係機関が、これから何をなすべきかをさらに検討していく必要がある。

自閉症の方々やそのご家族が安心してくださる社会のために何ができるのか、記念講演やシンポジウム、そして、各分科会での討議でこのテーマを掘り下げながら、自閉症の方々の多様化するニーズを受け止め、必要とされる支援やサービスを参加者の方々といっしょに考えていきたい。

2. 主催 全国自閉症者施設協議会
開催担当 全自者協北海道ブロック

3. 後援 北海道 札幌市
日本自閉症協会
北海道自閉症協会
北海道知的障がい福祉協会
自閉症援助技術研究会

4. 期日 平成21年11月5日(木)～6日(金)

5. 会場 札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北1条西6丁目
TEL 011-261-5311

6. 参加対象者
全国自閉症者施設協議会会員施設職員
知的障害者施設関係職員 保護者
その他の関係機関職員

7. 参加費

両日参加の場合：5,000円
1日のみ参加の場合：3,000円
保護者の方と当事者の方は
それぞれ1,000円割引となります。
(懇親会費は別途6,000円
弁当をご注文の場合別途1,000円)

8. 主な大会プログラム

【第1日目】 13:30～17:30 (受付開始12:30)

◇大会記念講演
「自閉症の方々に支援するということ」
～支援者がもつべき視点
北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター
教授 田中 康雄 先生

◇ミニシンポジウム
「自閉症の方々がくらしやすい地域社会のために」

【第2日目】 9:30～16:00 (受付開始9:00)

◇行政説明 高原 伸幸氏
(厚生労働省障害保健福祉部障害福祉課 障害福祉専門官)

◇鼎談 「自閉症者への支援と自立支援法」

◇分科会
第1分科会 「行動障がいへの支援」
第2分科会 「発達障がいを伴う
犯罪加害者への理解と対応」
第3分科会 「地域で暮らすための
さまざまな取り組み」
第4分科会 「さまざまな課題を示している
自閉症の方々への対応と相談支援」

9. 大会事務局

札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる
(加藤 潔)
〒007-0032 札幌市東区東雁来12条4丁目1番5号
TEL 011-790-1616 FAX 011-790-1604
Eメール sapporo-hattatsu@harunire.or.jp

編集後記

障害者自立支援法が施行され早3年。麻生内閣時代に「応能負担」に戻す改正案を3月に国会提出したが、衆院解散に伴い廃案となった。そしてこの度、政権交代し民主党が与党になり障害者自立支援法の廃止を表明、新制度の設計の為政策立案段階から、当事者、有識者を含む委員会「障害者制度改革推進本部」を設置する計画のようだ。障害福祉サービスの利用者負担を応能負担とすること、サービス支給決定制度の見直しなどを行い、障害者自立支援法に代わる「障害者総合福祉法(仮称)」を制定する計画があるようだ。これを機に是非とも、当事者の生活が政治によって大きく左右されない法案を望みたいものです。

(森下尊広)